の種の表現を自ら用いることは、世間に向かって臆面もなく自画自賛を行なっているととられても仕方がないのではないかと思う。人によっては「執筆」という言い方でさえ、厳密に言えばその種の表現だとするかもしれないのである。

読み進めれば進める程に増してくる〝雑音〟〝奇音〟に違和感をつのらせながらもようやく本書を読み了えた今、私はもう一つ別のことに対する違和感に囚われてしまっている。それは、著者が「序」や「あとがき」において展開している「思想史とは何か」（ii頁）という論にかかわってである。著者は「序」において「「人の意識・思想に焦点をあわせた歴史研究」を、私は思想史研究と呼んでいる」（ii～iii頁）とし、「歴史学としての思想史研究」（xv頁）という表現さえ用いている。「思想史研究」は「歴史学」に含まれているというこの把握に対しては私自身違和感を持つし、本会の会員諸氏からの少なからぬ異論も予想される。これについては、本学会としても徹底した議論がなされてよい事柄なのではなかろうか。

本書は、「思想史とは何か」という問題を論議する上で、たたき台とするに恰好の書物なのではないかと考える。

（玉川大学助教授）

松田京子著
『帝国の視線――博覧会と異文化表象』
（吉川弘文館・二〇〇三年）

昆野伸幸

一

これまで自明のごとく通用したグランドセオリーが崩壊しつつある今日、様々な新しい方法論に基づいた刺激的な研究が世に送られている。とくに国民国家論の隆盛は目覚ましく、それに対する異論も提出されてはいるものの、近代の諸学知が国民国家を成り立たせる重要な装置であることは間違いない。そして、今日の研究者の構築する学知もまた無意識的に国民国家内部に止まり、新たに「国民」を再生産することに通じていることは重く受け止めねばならない。「国文学」「国語学」「国史学」等と並んで、「日本思想史学」も決して他人事ではない。

近年では、このような国民国家論の提出した知見を背景としながらも、国民国家の枠組では捉えきれない現象を分析する方向で、国民国家論の再検討が進んでいる。すなわち、国家よりも小さい単位として地方が注目され、また逆に国家を越えた単位では帝国論や世界システム論が盛んである。国民国家の神話

が解体したかに見える現在においては、いずれの研究にしてもその意義はますます大きくなっているといえよう。とりわけ、最近は帝国をめぐる議論が活発であり、その中でも、これまでの政治的・経済的方面からのアプローチに対し、ポストコロニアル理論やカルチュラル・スタディーズの研究潮流とも共鳴しながら、文化の方面からの検討が非常に活況を呈している。国民国家論、フーコー、サイードの理論を参照しつつ、極めて強い方法的自覚に基づいた本書もまたこのような流れに沿うものであろう。

そもそも大日本帝国は、帝国のもとで生きた日本帝国臣民に様々な爪痕を残した。にもかかわらず、大日本帝国の崩壊後、日本国民（旧「内地人」）は、自らの使う日本語が帝国の言語であった事実を意識することなく、長らく忘却してきた。その忘却は、帝国のもとで盛んだった混合民族論が、敗戦による植民地喪失を契機に、単一民族論へと衣替えし、その結果単一民族神話が成立した経緯と重なるものである。このような事実が重視されるようになったのは、最近のことにすぎない。帝国が崩壊しても、戦後日本のアジア観に示されるように、かつての植民地・占領地を蔑視し、自民族の文化に優越感を抱く「帝国意識」は根強く残存し続けた。その残存は、決してメディアに現れる一部の政治家に限られるものではなく、ほぼ全ての日本国民における長年にわたる無自覚さに起因するものであろう。

それではなぜ「帝国意識」は、かくまで日本国民に身体化され、染み込まされたのであろうか。この疑問に答えるために、人類学、地理学、東洋史学といった学知が問い直されているが、ともすれば個別の思想家研究に止まったり、あるいは「日本的オリエンタリズム」と総括されることに終始しがちであった。また他方、かかるテキスト分析による帝国論の枠組から自由に、年齢や階層を越えて、身体レベルで一定の「帝国意識」を身に付けさせる、博覧会や行幸等の国家的イベント、儀礼も注目されている。臣民がひとしなみに「帝国」を意識するメカニズムの全体像は、これら様々な涵養装置に関する研究を総合してはじめて解明されるものであるが、従来このような総合はほとんどなされてこなかった。

本書は、一九〇三年に開催された第五回内国勧業博覧会を素材に、人類学者の知的枠組と博覧会という具体的な「展示」の「場」との関係性の解明に正面から取り組んだものである。以上のような流れを踏まえれば、まさにこの両者の結合にこそ本書の最大の意義が求められる。本書は、思想史的方法と社会史的方法とを架橋させることによって、研究史上新しい地平を切り拓いたといえよう。さらに、知的枠組と「展示」の「場」との関係性を問う本書の主題は、その研究史的意義の大きさに止まらず、著者自身の立場を反映している点からも重要である。つまり、日本語という観測者側の言語、すなわち支配民族の言語で書かれた資料、あるいは支配民族による一方的な「他者」表象のどちらかにのみ分析資料を求めることは、そのまま帝国

の論理を繰り返し、それに取り込まれかねない危険を内包している。両者の関係性を問う立場に立つことによって、はじめて帝国の言語、帝国による表象のどちらにも偏せず、ともに相対化しうる視座が確保できる。ここからは、著者が周到に張り巡らした予防線を読み取る必要があるだろう。

二

あとがきによれば、本書は、一九九七年に大阪大学に提出された博士学位請求論文を大幅に加筆・修正したものである。本書の各章は、一九九五年から二〇〇二年にかけて発表された個別論文が元になっており、序章と終章を書き下ろすことで、著者の最新の問題意識に貫かれた叙述になっている。

本書の構成は以下の通りである。

序　章　問題の所在
第一章　博覧会という「場」――第五回内国勧業博覧会と大阪
第二章　植民地パビリオン台湾館
第三章　調査・収集という「知」――台湾旧慣調査と伊能嘉矩
第四章　パビリオン学術人類館
第五章　人類学と「展示」――人類学者・坪井正五郎の思想
終　章　総括と展望

このような「本書の構成そのものが、本書の問題設定および方法的な独自性の所在を明示する」（一三頁）ことを踏まえながら、以下、各章の内容を紹介していきたい。

まず序章では、著者のサイード理解が示された上で、本書の構成を必然化させる方法的立場が提示される。

> 権力の不均衡な配分によって構成される「他者」に関する知的枠組が、展示という表象技法によって、広範な人々の前に開陳される実践のあり方を、社会的・歴史的コンテクストが折り重なる博覧会という具体的な「場」にそくして考察すること、その際、「他者」表象に関する知的枠組と実践の相互関連性を、具体的な社会的・歴史的コンテクストのなかで論じること、これが本書の方法的立場である。（九頁）

第一章では、第五回内国博が「国光国華を発揮する」「帝国」の博覧会であったことが強調される。「帝国」の博覧会開催を控えた大阪において、「貧民」「貧民街」は「われわれ」とは異質、「不潔」だと表象され、その言説が、「貧民街」を取り壊すという実践的な力の行使を正当化するものとして存在したことを指摘している。また「帝国」の博覧会は、大阪を「東洋の商都」へと「飛躍」させる近未来像を描き出し、この文脈からも「貧民街」は、「東洋の商都」大阪における「負の要素」として排除が正当化されていった過程が述べられ、その排除のもとに開催された博覧会は、文明としての「われわれ」という自負心を象徴的に支える「場」として機能したことを結論づけている。

第二章では、日本の博覧会史上初の植民地パビリオン台湾館が検討される。台湾館での展示は、台湾の人々自身による出品

物にしろ、総督府出品物にしろ、ともに「遅れた」台湾の異質さを表象していたことを指摘している。さらに台湾館に移築された篤慶堂は北白川能久と結びつき、尊い犠牲を払って領有した「征服地」台湾を表象することになったことを述べている。そして、このような台湾館で示された台湾表象の枠組は、人々の台湾認識に大きな影響を与えたと総括されている。

第三章では、台湾館の台湾原住民部門の展示責任者、植民地官僚の伊能嘉矩が主に取り上げられる。伊能においては、台湾原住民は漢族系住民との生存競争に敗れた者であり、かつ「純真無垢なる野蛮人」という二つの表象が矛盾なく存在していたことが述べられる。その上で彼は、彼らを八「種族」に分類・序列化したが、そこでは彼らを規定・表象する行為のもつ権力性は隠蔽され、正当化されたこと、そしてこの隠蔽こそが台湾館での展示に引き継がれたことを指摘している。

第四章では、学術人類館における「他者」の「展示」には、二つの「展示」があり、重層的な様相を呈していたことが述べられる。つまり、人類学という学知によって正当化された、「われわれ」とは異質な「種族」の「標本」とみなす「展示」と、その知的枠組に収まりきらず、「われわれ」との近接性を示す可能性をもつ「見世物」としての「展示」という二つの「展示」である。清国人、「琉球人」は、「展示」を行う主体と「展示」される客体との間の境界線を引き直し、自分たちを主体の側に組み入れることを求めたが、「内地」世論は、「文明人」としての「われわれ」は、「遅れた」「他者」に対して「文明化の使命」をもつという論理で、彼らの要求を無視したことを論じている。

第五章では、学術人類館の展示を指導した人類学者坪井正五郎の思想が検討される。まず人類一種論に立つ坪井が、「人種」を可変的な集団として分類不可能なものとする主張によって、表象の不可能性に陥ることを指摘する。ここでは、彼の「人種」観が、固定的な「人種」の優劣という語りを打破するものとして評価される。その一方で、「帝国」の版図拡大を契機とした「日本人種」＝「日本種族」への言及によって、彼は、固定的な集団として「種族」を語りだす、そしてこのような「われわれ」と異なる「諸種族」を自明のものとして設定し、序列化する思考が、学術人類館の経験をもとにして、その後の展示において顕在化していくことを論じている。

最後に終章では、第一に調査という実践は、人類学の学知を介することで「知」に昇華され、序列化を伴いながら表象された「他者」は、展示を契機に、再生産されていったこと、第二に展示という表象技法は、「われわれ」と「他者」との境界線を確固としたが、境界線の位置自体はつねに変わり続け、その可変性こそが人々を「われわれ」「日本人」への包括へと駆りたてたこと、第三に世紀転換期において「帝国」になるという意味を重んじ、日本「内地」の文脈でのみ記述されてきた事象を日本「帝国」の歴史に再把握すべき、という三点が総括され、

あわせて今後の展望が示される。

三

第五回内国博という「限定された社会的コンテクスト」（二頁）に徹底的に即した本書の議論からは、先の不十分な紹介には収まりきらない、数々の極めて有益な知見がもたらされた。評者の関心からは、とくに以下の点が興味深かった。すなわち、著者は、第五章で、一九〇四年に坪井によって開催された人類学標本展覧会において、各「種族」の「現在」の中に「日本」の「過去」を、そして「日本」の「石器時代」の中に各「種族」の「現在」を発見する思考の存在を指摘しているが、これは何も人類学固有のものとは言いがたい。一九〇三年、今日は「帝国的運動の時代」だと主張していた山路愛山は、「今猶古の如し、彼猶此の如し、画して彼、此、今、古となすは陋なる矣」という歴史認識を持論としていた（山路「余が所謂帝国主義(上)」『独立評論』二号、一九〇三年二月、同「今猶古の如し、彼猶此の如し」『国民新聞』一八九二年四月三日）。このような歴史認識は、坪井のそれと通底・共鳴しあうものであり、世紀転換期の「帝国」編制という観点から、史学の流れも含めて、総合的に諸学知を捉え直す必要性を痛感させられた。

ところで、先にも述べたように、本書の意義は、知的枠組と「展示」の「場」との関係性をこそ問うた点にある。しかし、皮肉なことに、本書を読んで抱く最大の疑問点は、まさにこの点に関係している。つまり、著者の巡らした予防線にもかかわらず、本書によってその両者の関係性――強固な「相互関連性」――が剔抉されればされるほど、あるストーリーが鮮やかに浮かび上がってくる。すなわち、日本が国民国家から「帝国」へと編制替えする世紀転換期において、約五三〇万人もの博覧会の観覧者が、人類学という学知に支えられた「展示」の「場」を通じて「帝国臣民」へと回収されていった、というストーリーである。確固とした「われわれ」「日本人」など存在せず、学知と価値観を背景に構成される「他者」表象は、版図内全ての人々に「われわれ」であり続ける実践を促すとすれば、観覧者は不可避的に「帝国」にからめとられる客体ということになってしまう。

この危惧は、終章において「本書の問題構成そのものの総括を行うことであり、今後の展望を模索することになる」（一六七頁）として構想される、日本「帝国」史という歴史記述にも及ぼされる。すなわち、本書の知見に基づいて、著者は、「日本「内地」のさまざまな事象が、東アジアの各地域で起きた事象と直接的、間接的に結びついていく」（一七五頁）ことを重視し、日本「内地」史を日本「帝国」史へと開いていくことを提起している。もちろんその必要性は、これまでも三谷太一郎「満州国国家体制と日本の国内政治――戦時体制モデルとしての満州国」（『岩波講座 近代日本と植民地』二、岩波書店、一九九二）、駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、一九九

六）、原武史『可視化された帝国』（みすず書房、二〇〇一）などの政治や文化の領域にわたる諸研究によって喚起され、「内地」中心の閉じた思考方法自体を対象化する意義は、今日において十分共有されているといえよう。ただし、著者自身、危惧を表明しているところではあるが、かかる日本「帝国」史という記述は、不可避的に「帝国」へと回収されていくストーリーに落ち込みかねず、一種の中心化をもたらしてしまいかねない。実際、この歴史記述は、宗主国内部の現象と植民地での現象との結びつきは「少なくとも日本「帝国」の崩壊まで、密度を高め範囲を広げながら強まることはあっても、弱まることはなかったのではないか」（一七五頁）という著者の「見通し」につながるように、日本「帝国」の抱えた矛盾よりもその確固さの論証に帰着しかねない。

以上のような危惧を抱かざるを得ないのは、畢竟、序章での問題設定と実際の論述との間における一種の不整合に起因している。つまり、著者は序章において、知的枠組と「展示」の「場」との「相互関連性」（九頁）のみではなく、両者の「せめぎあう場面」（七頁）「緊張関係」（一〇頁）を明らかにすることを意識していたにもかかわらず、第二章・第三章、第四章・第五章といった論述からは、両者の「緊張関係」よりも「相互関連性」が強調される結果になっている。この点は、著者自身「残された課題」として、「「他者」に関する知的枠組に「抵抗」して「他者」認識を行う可能性」（一七八頁）の有無の検討を挙げているように、十分自覚されているようである。しかし、種々の論争を経た国民国家論において、「非国民化の回路」の発掘こそが研究者にとって重要な課題として共有されつつある今日、氏の帝国論においても「非帝国臣民化の回路」の模索は不可欠だったのではなかろうか。

四

世紀転換期の第五回内国博の事例を根拠に、著者は以後の歴史を日本「帝国」史として構想する訳だが、そもそもその見通しを支える本書の議論に即して考えてみても、少々違和感は否めない。つまり、世紀転換期は、日本が「帝国」へと編制される中で、まだ植民地への統治方針が固まっていない時期に当たる。その後の歴史を見れば、間接統治を行ったイギリスなどとは異なり、日本は同化主義を押し進め、皇民化政策に行き着いたように、現地の社会組織や慣習を尊重したとは到底言い難い。そしてかかる統治方針が選択されていくにつれて、日本「帝国」における人類学の学知の意義は低下していったと推測される。植民地の拡大に伴って、各種展覧会や博物館の設置など、「展示」の「場」は、「内地」「外地」を問わず、ますます拡張していっただろうが、人類学の知的枠組と「展示」の「場」との強固な「相互関連性」は、統治方針の定まらぬ初期をピークに、以後敗戦に至るまでむしろ弱まっていったのではなかろうか。この点、伊能・坪井や彼らの後を継いだ人類学者に関する

さらなる思想史的研究が望まれようが、少なくとも本書の議論に即する限り、日本における世紀転換期という時期の特殊性を重視すれば、かえって日本「帝国」史という構想は、先に見た理論的危うさとともに、事実認識の上でも看過しえぬ陥穽を秘めているのではないか。

本書が明らかにしたように、帝国は、「他者」を「われわれ」とは異質な存在として表象する一方、境界線の引き直しによって、その異質な「他者」を恣意的に「われわれ」の内部に組み入れた。このような回路に対しては、「境界の設定という現象そのものを問う」（小熊英二『〈日本人〉の境界』新曜社、一九九八、六四〇頁）、あるいは「他者」の有する、「われわれ」とは徹底的に異なる固有性の強調によって「われわれ」を相対化する等の様々な対抗策がありえよう。それら選択肢の中で、日本「帝国」史という歴史記述の可能性の幅を広げるためにも、まずは多様な事例を一つひとつ掘り出し、位置づけていく作業がますます重要になってくるのではないだろうか。

例えば、著者が問題とする時期からはかなり後のことになるが、坪井に影響を受けた鳥居龍蔵や西村真次の研究は、日本戦闘的無神論者同盟によって、建国神話を批判する際のバックボーンとして活用されることになる（赤澤史朗「教化動員政策の展開」、『近代日本の統合と抵抗』四、日本評論社、一九八二、五七～八頁）。鳥居の学知が、「われわれ」「日本人」の同一性を根本のところで担保していた天皇制の神話を突いたことになる。また、表象する側に圧倒的な権力の偏重が認められることは確かだが、その中で支配民族による一方的な表象を、逆に表象される側が利用するような面もあったのではなかったか。本書に紹介されている、本来見られる客体だった「アイヌ」が演説する主体へと変貌した事例は、その可能性を示しているのではないか。これらの事例を掘り起こすことが、「非帝国臣民化の回路」の模索という困難な課題に対する解決の糸口となりはしないだろうか。

文化理論や社会史に縁のない評者が呈した疑問に関わりなく、本書は、世紀転換期の思想や帝国論に関心を持つ者全てに多大な刺激を与えてくれる。本書によって新たに示され、切り拓かれた諸知見、方法論に対して、評者はあるいは見当違いな意見を述べてしまったかもしれない。著者のご寛恕を請う次第である。

（東北大学助手）